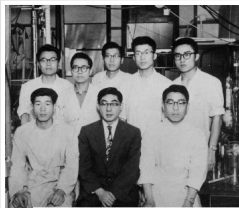




工化時報

第25号

物質応用化学科創設70周年記念号



Since 1938



新工化会会長あいさつ



工化会会長 関口 優紀

(昭和48年工業化学科卒)

藤池誠治前会長の後任として平成20年度より工化会会長に就任致しました。皆様と共に本会活動をより有意義なものにしてゆきたいと思っておりますので、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

昨年度の最大の行事は70周年記念会でありました。越智健二記念会会長、澤口孝志実行委員長、藤池誠治工化会会長のもと、会の総力をあげ実施にむけて取り組みました。ご出席の多くの方々より印象に残る記念会であったとお言葉をいただき、工化会の歴史の一区切りとなりました。

今年度の事業計画としましては役員会(平成21年4月18日)、通常総会(同5月16日)の開催、また例年のとおり講演会の開催(理工学部校友会後援)、オープンキャンパスおよび一日体験化学教室など種々の後援事業を予定しております、これらの事業を滞りなく進めてまいります。

さて昨今はどこをみても百年に一度の経済危機であるとの報道が目につき、アメリカを発端とするこの状況はあと2、3年続くのではないとも言われております。深刻さは企業において雇用調整にまで至り、大学もこの影響は免れず、就職採用内定の取り消しなども珍しくはありません。

未来永劫右上がり経済が成長することなどあり得ないことと承知していながら、誰もがそうありたいと思っているところに金融工学との美名にかくれたマネーゲームの破綻が実態を思い知らせてくれました。

個人の努力ではとても対処できない大きな問題ではありますが、しかしながら個人がそれぞれの環境で身近な課題に取り組まなければ解決出来ないことも事実であります。

このような状況において、大学と社会の接点である工化会の役割は、至近には多くの学生を社会に送り出せるように就職セミナー活動の強化や、社会を生きるにあたっての先輩諸

氏の経験やものの考え方を披露、伝授して行く場の提供が重要です。2万名を超える卒業生のネットワーク、現在も活躍されておられる先輩諸氏の力添えを得て就職セミナー活動をさらに充実させて行きたいと考えます。

ちなみに20年度は平成21年2月27日(金)に開催されました。

加えて、少し先を展望した研究活動支援も工化会の役割です。先に述べましたが経済システムのパラダイムシフトが起こりつつある今、新たな価値技術の創造を考えると来ています。限られた化石燃料の無駄使いをやめ、化学原料としてもっと効率的に用いる方法や触媒の開発、CO₂排出をより少なくする技術、原子力のよりクリーンで安全な利用技術、自然エネルギーを効率よく用いるソーラーシステムの開発など、大学に与えられた課題は少なくありません。物質応用化学科を構成する9分野、化学工学、環境微生物学、高分子工学、高分子合成、資源利用化学、生物資源化学、分析化学、無機材料化学、有機合成化学の各研究室ではそれぞれ研究室の特徴を打ち出しながら化学的なアプローチを用いて取り組みを始めています。グローバルな視点からの研究指導、そのカリキュラムで育成された研究者、技術者を世の中に送り出す必要性については自明でありましょう。

工化会も70周年記念にて賜った寄付金(総額1,200万円)の主旨に鑑み、各研究室の活動に本基金を当ててはいかがでしょうか。通常の研究費補助のみならず優秀な学生への奨学金、あるいは学会発表、海外出張や諸外国研究者同士の交流資金などが考えられます。

本基金につきましては工化会と物質応用化学科と共同で「基金運営委員会」を設立し、会員各位からのご提案も頂きながら適正かつ有効に運用させていただくよう準備を進めております。詳細につきましては工化会総会にてご報告申し上げたく、その旨ご理解の程よろしくご願ひ申し上げます。

これらの活動が新技術開発、研究成果を生む一助となることを期待し、量と質を併せ持った大学との評価を皆様と共に獲得したいものです。

最後にあたり、関係各位のご健勝とますますのご発展を祈念し、工化会会長挨拶とさせていただきます。

工化時報ご挨拶

日本大学理工学部長
滝戸 俊夫
(昭和50年博士課程修了)



平成20年は、物質応用化学科創設70周年を迎えました。そして創設70周年祝賀会が6月7日(土)に500名以上の卒業生の方々をお迎えして開催することができました。趣旨にご賛同いただき、祝賀会にご出席いただいた方々、そして募金をしてくださいました方々、さらに多大なるご寄附を寄せてくださいました方々に厚く御礼申し上げます。そして、なにより総務委員の一員として、本事業にかかわりましたことは私にとって大いなる喜びであります。また平成20年は物質応用化学科70周年ばかりでなく電気工学科80周年、物理学科、数学科の50周年、航空宇宙工学科、電子情報工学科、海洋建築工学科の30周年と7学科にわたる周年事業が展開された記念の年でもありました。

年の瀬、清水寺管主による平成20年を表す漢字が「変」と揮ごうされましたことは皆様もご記憶に新しいことと存じます。この「変」の意味するところは、アメリカの大手証券リーマン・ブラザーズの破綻による全世界の景気大不況、アメリカ大統領の交代劇そして大気汚染、森林破壊による異常気象や地球温暖化などの環境変化の顕在化等々を示している象徴的な漢字とうけとめられます。そして平成20年は日本大学、日本大学理工学部にとりまして大きな変化を迎えた年でした。日本大学では6月に総長選挙が実施され、平成17年の総長選挙で理工学部から選出された小嶋勝衛総長に代わり、生物資源科学部から酒井健夫教授が日本大学第12代総長となり、9月より新体制となりました。

理工学部におきましては7月に学部長選挙が実施され、越智光昭学部長に代わりまして、10月より、私が第13代理理工学部長となりました。力不足は否めませんが理工学部教職員の方々の力強いご協力をいただきながら現在、新体制を整え、21世紀にふさわしい新生理工学部を構築すべく改革を進めております。

振り返って見ますと、理工学部は創設以来90年になろうとする歴史ある学部です。創設当初より社会における「モノづくり」を实践できる技術者の育成を目標に掲げ教育を進めて、時代の要請とともに大きく成長し、現在12学科、そして大学院17専攻を擁する学部になりました。平成20年10月号の雑誌プレジデントに、上場企業の経営陣44,389名の調査による「社長・役員になりやすいトップ160」として、日本大学理工学部は12位(参考:慶応義塾大学理工学部13位)にランクされています。そして実際はこのデータ以上の多くの先輩方が科学技術立国を標榜する日本の工業界や産業界の中核となり、社会の発展に大きく貢献しています。このように卒業生の方々の社会での活躍は目覚ましいものがあります。

しかし、ほぼ「大学全入時代」を迎えた現在、諸先輩方と同様に実社会での活躍を継続するためには、学生の学士力の向上と社会のニーズをしっかりとらえた学部改革が必要と考えます。そこで理工学部では、偏差値60の実力を持った卒業生の輩出を方針として打ち立てました。すなわち、1)入学時に学科の教育方針と特徴・社会への貢献度・学科の将来展望を十分に理解させ、卒業時に至るまでモチベーションを維持でき、社会に貢献できる付加価値の高い学生を育成する教育プログラムの確立、2)現在の多様化した社会の要請に対応し受験生に選ばれる学部組織の再編成、3)学生が気力を横溢させ、学生生活を謳歌できるキャンパスの環境整備、4)多数の卒業生との相互協力による産学官民連携体制を強化した理工学分野における技術革新の推進を重要課題として積極的に改革に取り組んでまいります。そして日本大学理工学部に学び、卒業したことを喜び、誇りと自信、勇気を持って社会で活躍できる学生を一人でも多く社会に輩出することを目指します。

産業廃棄物の収集・運搬、中間処理及びリサイクル



〒341-0044 埼玉県三郷市戸ヶ崎3-302

60年卒 鈴木義弘

TEL 048-955-1632 E-mail: sanei-k@misato-net.com

ホームページ: <http://www.misato-net.com/3ak/>

多様性の世紀の幕開けにあたり 日大人として思うこと



理工学部物質応用化学科
教室主任 西宮 伸幸

サブプライムローンの破綻をきっかけとする世界的不況の中、アメリカの世紀が終わった、ガソリン自動車を各人が所有する時代が終わった、などという終末論が盛んである。終わったとすると、始まったものは何か、考えてみる必要がある。

「科学は肯定のための否定の連続である」。NHK 教育テレビの番組でノーベル物理学賞の益川さんがこう述べた。

「私は UFO を見たことがあるのに、UFO の存在を信じない人が多い。益川さんは UFO を信じますか？」という女子中学生の問いに答える際に出たフレーズである。UFO だと誤解される現象は世の中に多い。その誤解のどれとも違うと否定できるか。一つのことを肯定するには無数の否定が必要である。前向きな益川さんの言だからこそ意味が深い。

戦後民主主義という言葉がある。アメリカによってもたらされた民主主義、個人の権利を過剰に主張する民主主義、そういうマイナスイメージとともに用いられている。だからといって、民主主義を否定するのか。だいたい、日本には大正デモクラシーというものがあつた。明治維新の頃には福沢諭吉が西洋の自由と平等の考えを持ち込んでいる。戦後の民主主義も促成栽培でできたわけではなく、日本に十分な土壌があつたからこそ根づいたのではないか。

科学の原理は個人や文明に依存せず本質的に普遍的なものであるが、社会科学の理念は文明に固有のものだと思われる。例えば、「人間は生まれながらにして人間らしく生きる権利を有する」という趣旨の日本国憲法 25 条の規定は、異なる文明でも共通に認められるものとは言えないだろう。人類が何かの都合で滅亡して地球上にもう一度文明が興った時、科学の原理は同様に発見されるだろうが、この生存権の概念が同様に確立されるとは限らないだろう。

アメリカの世紀が終わったとして、次に来るものは何か。一つのを打ち立てるためにまた無数のものを否定しなければならぬのか。自由平等の考えや生存権だけは先進諸国の叡智として今後の文明に無条件で引き継いでもらいたいと思うが、BRICs と並び称される国々はそうやすやす

と受け入れないだろう。

自然科学と異なり，社会科学は言葉の定義が難しいという。研究者間で一致を見ることが少ないという意味である。また，その言葉が用いられる環境が変わると意味合いも変わる。たとえば，国民主権と言う時，民主主義・デモクラシーの体制下だと二大政党の何れかを選ぶという形を伴い，共和制だと国家のリーダーを選ぶという形になる。典型的な民主主義・デモクラシー国家と思われているアメリカでさえ，ワシントンからリンカーンまでの時代は共和制だったという。

ドイツのライン川のほとりで1週間のワークショップがあった際のエピソードを紹介する。日本だと，紅白歌合戦とか，相撲の東西とか，全体を二つに分けて競技することが多い。源平の合戦とか，関が原とか，日本を二分する事件がその背景かもしれない。アメリカだと南軍と北軍に分かれて競技をすることを想起しつつ，あなたの国ではどうか，と問い掛けたところ，欧州の人は皆，例外なく不審な顔をした。二つになど分けられない，というのが彼らの答えであった。

アメリカの世紀が終わって多様性の世紀が来るという。私見では，これは欧州型のものでなければならない。そして，自由平等の考えや生存権を天賦のものとして守り抜く世紀でなければならない。欧州統合の理念はサステナビリティであるが，これをサバイバビリティに落としてはいけない。

2008年秋，物質応用化学科がリーダーを出したオール日大プロジェクトが本部に採択された。「健やか未来」の構築がその中心課題である。これはサステナビリティにほかならないと思うが，社会科学的ターミノロジーを避けてわざわざ造語したところに意味がある。あとは，これに魂を込め，学科全体の研究によい影響を与え，さらに教育力の向上に波及させるだけである。同じ時期，滝戸俊夫教授が理工学部長となり，その後の教室主任を筆者が務めることになった。同時に澤口孝志教授が研究所長を拝命した。シフトは万全である。

2009年初頭の箱根駅伝では，ダニエルの20人抜きとシート権獲得を決めた10区の走りに注目が集まったが，一人の脱落者も出さない地道な総合力が結局は勝利をもたらしたと言えるだろう。卒業生の皆さんとともに日本の重心を良い方向に動かす努力を着実に続けていきたいと考えている。

学科創設 70 周年記念会報告



創設 70 周年記念会
実行委員会委員長
澤口 孝志

(昭和 51 年修士課程修了)

祝賀会は平成 20 年 6 月 7 日(土)17:00 よりアルカディア市ヶ谷 3 階富士の間で行われた。卒業生 435 名、来賓 26 名(総長・理事長, 副理事長, 理工学部長, 理工学部事務局長, 事務 3 役, 各学科教室主任)を大会役員 26 名およびスタッフ 71 名(助手事務・副手以上准教授以下 26 名, 学生お手伝い 45 名)が出迎え, 総勢 560 名が集う中, 「若きエンジニア」の一節が若手教員によってハンドベルで奏でられ爽やかに開会が宣言された。若手スタッフが作成した 10 頁に及ぶ祝賀会記念葉の次第に従って, 記念会会長(越智健二)による開会の言葉, 工化会会長および物質応用化学科教室主任(滝戸俊夫)の発起人代表挨拶につづいて, ご来賓(日本大学総長・理事長小嶋勝衛教授, 日本大学理工学部長越智光昭教授)の祝辞を賜った。乾杯に先立ち, 故松本太郎先生および太田善造様に, 工化会の運営への多大なご支援に対し工化会会長より感謝状が贈られた(写真 1)。ピンク色の理工学部のハッピを纏ったご来賓および大会役員による鏡開きに続き, 工化会前会長(安達昭郎)により 70 周年記念と刻印された枥酒を高らかに掲げ, 乾杯した(写真 2)。

和やかな雰囲気の中, 創設 50 周年記念会以来の卒業生が一同に会した祝賀会は「一期一会」を確かめ合い, 一気に若きエンジニア時代に戻り互いの健闘を称え健康を喜び分かち合った(写真 3 及び 4)。会場には, 学科および研究室の変遷と現状を紹介したパネルが展示されるとともに, 理工学部のイベントで評判を得ている学科の特徴を活かした「七宝焼き体験コーナー」が白衣姿の学生たちによって披露され, 70 と刻印されたグッズを手にして化学実験の素晴らしさを改めて実感した。

写真 1



写真 2



写真3



写真4



宴たけなわとなったところ、司会（工化会副会長 関口優紀）より日大をこよなく愛する日大ファミリーが壇上で紹介された。70周年までの若き思い出と80周年記念につなぐそれぞれの熱い思いが語られた。マイクを離さない場面もあり記念会は異様なほどに盛り上がり、その絶頂を捉え参加者全員で「若きエンジニア」を大合唱し同胞たちの気概をしっかりと心に焼き付けた。あっという間の2時間であった。記念会実行委員長（澤口孝志）が感謝の意を表すとともに80周年に繋ぐ教員たちの責任を会場に皆さんとともに誓う「一本締め」で会を閉じた。

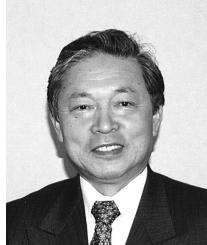
物質応用化学科ならではの記憶に残る手作りの記念祝賀会を和やかに運営することができたのは、一重に若きスタッフたちのきめ細かい連携と素早い行動による。実行委員長として改めて感謝申し上げます。学科の末永い繁栄が80周年記念会に繋がり再会できることを心よりお祈り申し上げます。

平成20年度 新任紹介

星 徹 先生
高分子合成研究室 助手



はじめまして、平成20年度より高分子合成研究室で助手を務めます星と申します。私は平成11年度に工業化学科から名称変更した物質応用化学科に一期生として入学し、修士課程修了まで6年間お世話になっておりました。その後、東京大学大学院博士課程に進学し学位を取得して日本大学に戻ってきました。私の研究は修士課程から継続して、混ざり合わない2種類以上の高分子を超臨界二酸化炭素という新しい媒体を用いてナノサイズで混合した新材料の開発を行っています。この方法を有効活用することで新規医療用高分子材料の作成や有機溶媒を極力使用しない環境に優しい材料の合成・修飾プロセスの開発など様々な分野での応用が期待されています。これから大学教員として研究と教育に精一杯努力する所存でおります。よろしくお願ひ致します。

学科創設 70 周年祝賀会に参加して

前工化会会長
藤池 誠治
(昭和41年工業化学科卒)

学科創設70周年記念祝賀会の参加にあたり、当時の工化会会長の立場と実行委員の一員として一言述べさせていただきます。本学部を卒業した時代は、生産重視の重工超大型の経済であり、まさしく工業化学が応用化学より当てはまる名称だったと思います。70周年の名称が、物質応用化学となりましたのも、時代のニーズに足る学科としてこれからの時代を担うものと確信しています。

20000名の卒業生を社会に送り出し、各界で活躍されている大勢の諸先輩や後輩が、一同にこのように多勢集まり、再会出来た喜びは仲々味わえるものではありません。歴史の重さと、引き継がれた先生方の弛まぬ努力と指導のお蔭であります。日本大学総長小島勝衛様を始め、大勢のお客様をお迎えしての祝賀会は、560名という出席の元、多様なイベントの中、にぎやかに、そして理工学部化学の力を示す良い機会となりました。70周年という節目に、工化会の会長として、一員に拘わらせていただきました事は、私にとって大きな事柄として忘れられない思い出となりました。これを機に、益々学友の結束を深め、大学と企業との活発な交流と、日本大学理工学部の高揚を互いに意識し合い、物質応用化学の認知度を上げたいと存じます。終りにあたり、越智実行委員長をはじめ、諸先生、若手の先生方のご協力で、素晴らしい会が開けました事、又、出席いただいた方々が満足して、次の周年を期待しながら帰られた事に感謝申し上げます、今後も益々の繁栄をご祈念申し上げます。

静電容量型変位計・超音波リニアモータの輸入販売

Progress & Creativity

ピー アンド シー株式会社

〒150-0013 東京都渋谷区恵比須1丁目20番8号

(エビススバルビル5F)

電話 (03) 5793-1561 ファクシミリ (03) 5793-1562

昭和35年卒 代表取締役 安達昭郎

クラス会・同窓会の報告

同輩全員が古希を迎えての工化35クラス会

平成20年は工業化学科創設70周年を迎えるとともに我ら同輩もこの3月末をもって全員が古希を迎えた記念すべきクラス会が平成20年11月14日(金)に市ヶ谷の私学会館で開催されました。市川次良先生を迎え総勢20名が集い記念の酒杯を古川君の音頭で挙げ、一分間スピーチ、歓談に華を咲かせました。歳の割には皆さん未来を見つめる話題が多く、それぞれ元気をアピールしていました。欠席者の多くの仲間からは近況の知らせを受けています。前回のクラス会以降2年間での物故者は矢後君、赤澤君の2名でした。次回は平成22年11月上旬を予定しています。皆さんの参加を待っています。(安達記)



出席者：

写真の前列左から(敬称略)、篠、野島、大久保、市川先生、藤田周二(先生の前)、黒木(旧姓金子)、安達、白石
後列左から、南、山本周治、古川、原、倉形、本橋、定方、三浦、鈴木修、高尾、増田、永井登

平成21年度高分子合成同友会開催のお知らせ

高分子合成研究室は1972年に設立されてから2008年3月までに約900名の卒業生を輩出しており、本年39期目の卒業研究生を迎えた。第7回目の総会は2008年11月22日(土)駿河台1号館にて昭和49年卒業の小川太一博士からの講演もあり、約100名の参加により大盛況であった。また新企画として、懇親会の席上で大学院生の研究ポスター発表会を行い、優秀賞を3名に授与した。本会は、豊富な人材ネットワークを気軽に活用できるサロン風産学連携拠点として研究室の枠を超えたネットワークへの発展を強く願っている。

興味ある方は研究室(澤口sawaguti:03-3259-0819;萩原hagiwara:-0433;星hoshi:-0825;****@chem.cst.nihon-u.ac.jp)にご一報を!第8回同友会総会は2009年11月21日(土)1号館2階カフェテリアにて開催される。

(同友会新役員 津野岳彦会長、関口優紀、澤口孝志及び古橋雄二副会長、丸山照仁幹事長、小笠原守人、岡崎弥寿子及び三柴晶子会計、新国禎倅及び鳴原靖宏監査)

退職します。

真下 清

(昭和43年修士課程修了)

2009年3月末をもって日本大学理工学部を退職します。1968年(昭和43年)4月に理工学部助手として奉職以来、ちょうど40年間勤務したことになります。秋田穰先生、和井内徹先生に学生時代に師事してから、ずっと同じ研究室での生活でした。40年間の教員生活は山あり谷ありの人生であったと思っております。就職した年に大学紛争が起きましたが、これは私の人生にとって今思い出してもインパクトのある出来事でした。これを契機に日本大学そして理工学部の体質が変わったことは間違いありません。

忘れられない思い出の中には学科名称変更があります。教室主任をしていた1996年(平成8年)の正月休みにこれからの教室の方向性について考えていました。受験者数の減少が続いていくなかで、どうしたらそれを食い止められるか、まずは名称変更をしたらという思いに至ったのです。歴史と伝統、そして先輩達の思い入れのある工業化学科という名称を変えることには大きな抵抗があると予想されましたが、駄目元と考え、教室に提案しました。約半年後に諮問した委員会から「物質応用化学科」が教室に提案され、審議の結果変更が決まりました。ただ教授会では時期尚早というような意見も出ましたが、最終的には認められました。文部省(当時)の認可後最初の入試における受験生の動向が気掛かりでしたが、前年度より受験者数の増加を見て安堵を覚えたことを今でも思い出します。

教育と研究はそれなりにやってきたと思っています。NMR法による定量分析の研究から石炭科学、そしてバイオマスや廃棄物の再利用に関する研究へと発展してきました。

学会活動も(社)日本エネルギー学会副会長を2005年から4年間務めることができましたし、現在はプラスチックリサイクル化学研究会会長を務めています。また、NEDO技術委員を4年、NEDOプロジェクトの評価委員長や審査委員長も務めました。教育関係では(社)日本工学教育協会事業企画委員や関東工学教育協会常務理事など務めました。したがって学会活動等は自分なりにやってきたつもりです。

大学では2005年10月より2008年9月まで理工学部次長を務め、理工学部の運営の一端を担い、改革を押し進めたと思っています。

以上のように65歳の定年を約1年半延長してもらい、やるべきことはすべてやってきたとは言えませんが、それなりの自負はあります。研究ではもう少しやり残した感がありますが、もう潮時でしょう。40年間皆様からご指導、ご鞭撻をいただき有難うございました。

退職にあたって



栗田 公夫

(昭和40年修士課程修了)

神武景気の時に高校生であった私は、隆盛期を迎えつつあった石油化学工業界に身を置きたいと思い、雪国の越後・春日山麓から上京し、工業化学科に入学しました。入学以来50年、大学に奉職して44年と、人生のほとんどの期間を駿河台2号館で過ごしたことになります。ここまでつつがなく過ごせたのは、高分子工学研究室の現スタッフである清水繁教授、伊掛浩輝専任講師をはじめ、学科の新旧教職員ならびに卒業生のご支援・ご協力のお陰と感謝しております。

さて、冒頭の志は、学部3年生の頃になると変化が現れ始め、いつの間にか大学の助手を目指しておりました。卒論は、化学工学研究室の小島和夫先生のもとで、大学院は、接着の世界的権威者の金丸競先生が創設した高分子工学研究室に所属しました。同研究室に助手として採用されたとき、理化学研究所から和田英一教授が同じ金丸研に着任され、和田先生から日本で最初に導入したKratkyカメラと呼ばれるX線小角散乱装置のノウハウを教えられました。そのおかげで、1978年頃から始まったつくばの高エネルギー物理学研究所の中性子小角散乱装置の装置グループ員として参加させていただき、2年後の昭和55年6月18日に世界に先駆けてパルス中性子放射の瞬間に立ち会えた感動は、今でも忘れられません。また、助手になりたての頃起きた大学紛争も忘れることの出来ないことの一つです。

このほか、工業化学科創設50周年、21世紀に向けた物質応用化学科への名称変更、昨年行われた70周年記念事業など学科の主要な行事に参画できましたので、微力ながら学科・工化会に寄与できたと思っています。

最後に、本年度は、キムタクのチェンジ、オバマ米大統領のチェンジがありました。私も退職を機にチェンジを模索中です。

PVC・他合成樹脂 コンパウンドメーカー

昭和化成工業株式会社

- | | |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> 本社・工場 〒348-8585
埼玉県羽生市小松台1-603-29 | <input type="checkbox"/> 東日本支店 〒113-0033
東京都文京区本郷3-6-9 エルデ本郷館4F
TEL 03-5840-5531 FAX 03-5840-5541 |
| <input type="checkbox"/> 総務・経理
TEL 048-561-5221 FAX 048-561-5229 | <input type="checkbox"/> 西日本支店 〒532-0011
大阪府大阪市淀川区西中島4-3-8新大阪阪神ビル10F
TEL 06-6307-2727 FAX 06-6307-2748 |
| <input type="checkbox"/> 生産管理・購買
TEL 048-561-5222 FAX 048-561-5229 | <input type="checkbox"/> 北陸支店 (2007年3月開設予定)
福井県福井市日之出1-29-1 |
| <input type="checkbox"/> 技術開発
TEL 048-561-5226 FAX 048-561-5228 | <input type="checkbox"/> VINA Showa co.,Ltd.
ベトナム/ホーチミン市 |
| <input type="checkbox"/> 品質管理
TEL 048-561-5226 FAX 048-561-5496 | |

昭和53年卒業 代表取締役社長 池本 俊一

平成20年度 就職状況

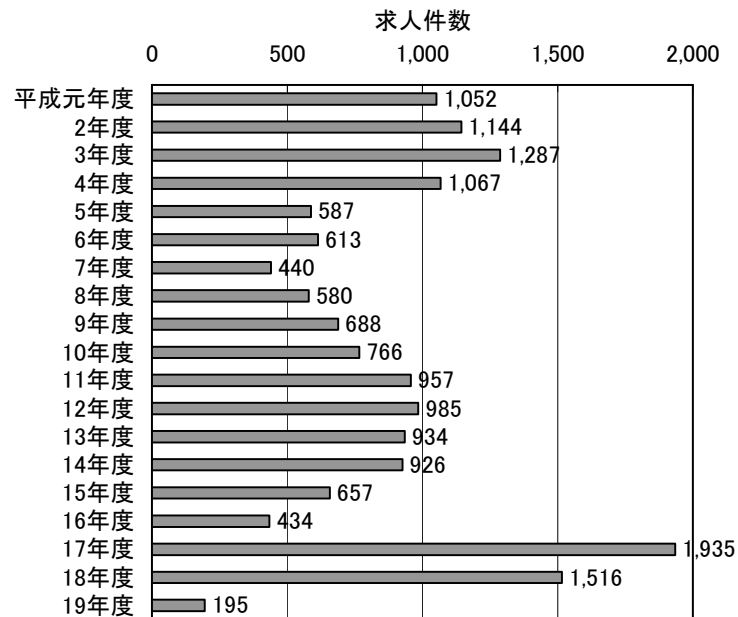


応化就職指導委員会
委員長 栢木 勝己
昭和44年修士課程修了

○進路状況の変遷

物質応用化学科（旧工業化学科）の就職進路状況は、理工学部進路先（1994-2000版）、物質応用化学科ガイドブック（1993-2000版）、工化時報等の出版物に記載されている。平成元年度から平成19年度までの求人件数を次に示す。

表 求人件数の変移



これより、学科に企業から送られてきた求人件数はおおよそ1,000件程度であり、バブルが弾けた1993年度～1996年度は500件程度にまで減少したが、最近になって情報系の多様化に伴って毎年徐々に増加している。学生は企業から学科に送られてくる求人情報および日本大学が開設しているNU就職ナビより、OB、OGの就職先を知るが、最近では、日経ナビ、毎ナビのように求人情報を各人がコンピュータで検索し、学生と企業とが直接、接触する方法が普通になってきている。

また、産業分類別就職状況の推移に関しては、平成5年度と平成16年度を比較して、学部については、先ず製造業の割合が50%から30数%に減少し、情報通信業が数%から10%に増加し、また進学が10数%から25.6%に増加している。大学院については、製造業が60%以上を占めているが、やはり情報・サービス業が増加している。また、公務員、教員数も毎年数人ではあるが、継続して就職している。いずれにしても、就職決定率は男女の区別なく就職希望者のほぼ100%に達している。詳細は「日本大学理工学部物質応用化学科70年の歩み」を参照されたい。

○平成20年度就職状況

平成20年度就職状況としては、学生にとって好調であるといえた。就職決定率は、男女の区別なく就職希望者のほぼ100%に達している。しかし、平成20年10月に起きたサブプライム問題の破綻による景気の悪化により、内定取り消しも出ている状況になっており、次年度の就職状況の悪化が懸念される。

なお、物質応用化学科と工化会共催の就職セミナーも3回目を向かえ、平成21年2月27日(金)に開催される予定である。

主な就職先

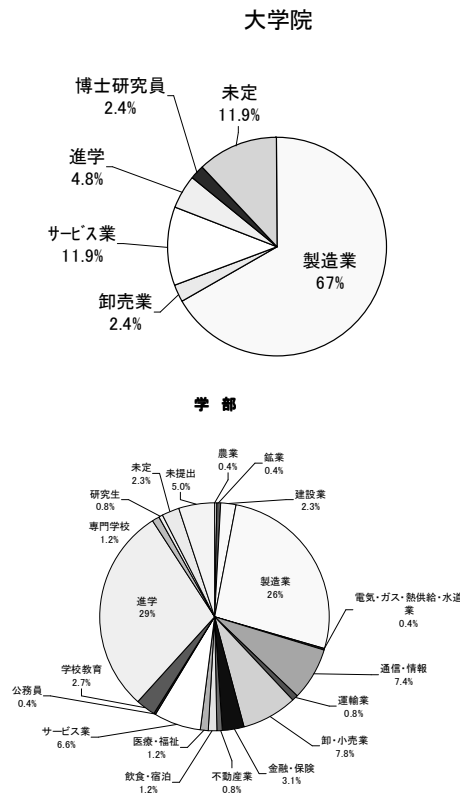
【製造業】三洋化成工業、ポリプラスチック、共同印刷、大日本印刷、ロンシール、横浜ゴム、東京ケミコン、吉野石膏、東京応化工業、花王、YKK、アステラス製薬、イカリ消毒、コスモ石油、旭化成、新興プランテック、ワコール

【情報通信業】みずほ銀行、エイチ・アイ・エス

【教育】日本大学理工学部助手

【公務員】東京消防庁

【その他】曾我特許事務所、日本ガス機器検査協会



平成20年度工化会事業報告

平成20年度工化会通常総会は、駿河台校舎8号館の832会議室において平成20年6月14日(土)午後5時より、役員・会員43名の出席を得て開催されました。議長には藤池誠治本会会長を選出し、庶務、会計、会員、会報の各委員会の平成19年度事業報告および会計報告、ならびに平成20年度事業計画および会計予算案、役員改選、理工学部校友会の個人表彰の推薦等の審議を行いました。事業計画としては役員会、通常総会の開催、講演会の開催(理工学部校友会後援)、駿河台入試フォーラム2008、オープンキャンパス2008、女子高生のためのCSTセミナー、日本大学理工学部一日体験化学教室、第3回物質応用化学科就職セミナーの後援、また今年度から短期大学部(船橋校舎)にて実施された短大オープンカレッジ2008にも後援することになりました。平成21年度入試のためのオープンキャンパス2008は今回から2日制となり、8月2日(土)～3日(日)にかけて船橋校舎で行われました。物質応用化学科のイベントに参加していただいた高校生は、延べで411人と、昨年度実績309名(33%増)を大きく上回り、盛況のうちに終了しました。また短大オープンカレッジは、地域の方との交流を目的として企画されたイベントであり、本年度は「ものづくり&サイエンス・スクール2008」と称して平成20年11月3日(月)に行われ、延べ243人の来場者があり、評判は上々であったと聞いています。

平成20年度の工化会予算については、平成17年度から工化会の予算は経常会計予算と特別会計予算の2種類を作成しており(経常会計とは準会員(学生会員)還付金を管理するための会計です)、平成20年度経常会計予算は221.3万円(内訳は前期繰越金159.2万円、校友会補助金59.0万円)、特別会計予算は1016.0万円(内訳は前期繰越金779.8万円、校友会割戻金1.2万円、会費80.0万円、その他155.0万円)、一方、経常会計予算の支出では庶務関係費91.4万円、会報関係費95.0万円(工化時報発行・運送費)、会員関係経費18.0万円を予定しています。また、特別会計予算の支出では庶務関係費90.2万円、会計関係費2.8万円を見込んでいます。

平成20年度における会員諸氏による会費の納入状況(平成20年4月1日～平成21年1月20日)は、納入者数505名、納入金額は約75万円となっています。納入者の中には複数年度分の会費を納入された方や、寄付をお寄せいただいた方も多数おられますが、本号の会費納入者氏名一覧の掲載を持ってこれらの方々への御礼に換えさせていただきます。

さて、本年度は3年に一度の工化会役員の改選の年に当たり、総会における審議の結果、平成20～22年度の会長は関口優紀氏(昭和54年修了)、副会長は越智健二氏(昭和38年修了)、深澤豊史氏(昭和58年修了)が選任されました。また、平成20年7月9日に行われた理工学部 of 学部長選挙にて、滝戸教授が学部長(任期:平成20年10月～平成23年9月)に当選したことから、物質応用化学科においても教室主任選挙が行われ、新主任(任期:平成20年10月～平成21年9月)として西宮教授が選出されました。これにより、工化会においても、教室主任を務める工化会名誉会長も西宮教授に交代しました。なお、工化会の各委員会の委員長には次の方が選出されました。

庶務委員会:澤口教授, 会計委員会:栃木教授
会員委員会:櫻川教授, 会報委員会:秋久教授

一方、本年度は理工学部校友会の役員の改正もあり、工化会として平成20～22年度の常任幹事(11名)および副会長(1名)を推薦しました。副会長には関口工化会会長を、常任幹事には新たに、藤池誠治氏、炭田幸宏氏が決まりました。

なお総会終了後の恒例の懇親会は、前週の6月7日(土)に物質応用化学科70周年記念の祝賀会が催されたため(詳細は別頁の記念会報告をお読み下さい)、本年度は開催を見送りました。

最後に平成20年度の工化会主催行事ならびに後援行事の概要を記載します。

- ① 平成20年4月19日(土) 15:00～17:00 役員会
 - ② 同年6月14日(土) 15:00～17:00 通常総会
 - ③ 同年7月19日(土) 日本大学理工学部一日体験化学教室
 - ④ 同年7月20日(日) 駿河台入試フォーラム2008
 - ⑤ 同年8月2日(土)～3日(日) オープンキャンパス2008
女子高生のためのCSTセミナー
 - ⑥ 同年11月3日(月) 短大オープンカレッジ「ものづくり
&サイエンス・スクール2008」
 - ⑦ 同年12月12日(金) 講演会
 - ⑧ 平成21年2月27日(金) 第3回物質応用化学科就職セミナー
- 以上 庶務委員会

和井内 徹 先生 秋の叙勲

和井内徹先生は2008秋の叙勲で瑞宝中綬章を受章されました。これは物質応用化学科にとっても名誉のことです。先生は理工学部長を歴任され、大学へのご貢献が大であったことが受章の理由と考えられます。(真下 記)



理工 circular 100号より
転載(学部長時代)

会費納入者名簿 (平成21年1月22日現在)

昭和16年卒業	小倉 契秀	貫井 達夫	伊藤 道夫	高橋 秀雄
和田守 哲治	昭和25年卒業	福島 敏郎	石井 孝二	玉置 憲三
天野 章	小林 猛夫	堀 武	石渡 正夫	藤森 信正
櫻村 正久	市川 安邦	牧 宏	工藤 富司	宮 道夫
津崎 統一	尾高 陽一	牧野 迪正	小谷 豊	横倉 隆康
昭和17年卒業	木根洩 弘水	渡邊 靖	園田 勲	小田切 孝光
小川 守三	黒須 朗雄	吉川 和夫	田中 昭男	栗原 孝夫
稲垣 達雄	榎田 雄三	昭和29年卒業	田村 浩司	昭和35年卒業
佐藤 恒男	丹野 諭	浅川 和昭	竹内 孟	安達 昭郎
笹岡 義人	古舘 和夫	井出 道明	竹原 晃	青木 滋夫
昭和18年卒業	吉田 耕一	石井 喜悦	坪井 聰介	伊藤 博康
川上 利重	昭和26年卒業	石垣 重昭	東海林 正	石川 好隆
加藤 泰正	鈴木 信夫	井上 秀雄	樺本 弘昭	内田 穆堂
浅谷 公洋	棚橋 和弘	尾崎 実	西田 金誉	大久保 保夫
穴山 義正	平田 達男	加藤 浩一郎	細谷 文夫	笠井 啓也
金井 昇介	稲垣 正	瀧谷 俊雄	矢作 栄甫	梶原 康敬
小林 和夫	植村 治	谷川 清	依田 恵市	河合 哲次
笹生 仁	太田 精一	中嶋 貞夫	池嶋 敬宜	小見川 健
平田 好顕	加納 照彦	中村 百樹	江部 明夫	酒井 孝次郎
昭和19年卒業	川西 正人	藤波 篤郎	篠沢 明	定方 聰博
脇 幹夫	小島 和夫	村松 俊作	渋谷 六郎	瀧澤 文男
浅野 良哉	田中 幸徳	八田 肇	村松 勉	難波 純一
神谷 洋	渡邊 光夫	米山 廣保	福島 弘之	西嶋 泰世
玉置 弥栄	昭和27年卒業	大内 蕃	昭和33年卒業	野島 秀次郎
昭和20年卒業	植松 貢	高橋 久雄	阿部 正明	原 幹夫
風間 匡英	柏木 治彦	米田 虎雄	丸山 義三	堀 正
安彦 不二雄	日置 隆	廣橋 亮	青山 達也	町田 収
畦元 直三郎	雨宮 学	昭和30年卒業	五十嵐 輝行	谷田部 寛昭
有山 勝陽	市川 次良	高野 俊彦	稲田 欣一郎	米田 修一
伊藤 和雄	勝又 茂	古川 新	大井 壽	渡邊 高章
磯 基道	神戸 貞治	松田 誠一	奥野 士郎	遠藤 脩造
太田 善造	木下 眞喜雄	森 康男	加賀 勘之助	尾崎 武二
澁谷 洋平	櫻田 輝志	植竹 和也	柏崎 敏郎	倉形 邦英
杉浦 銀蔵	新谷 光良	笠間 三男	熊谷 祐一	佐久間 恒和
昭和21年卒業	直川 準	臼井 徹郎	小林 脩一	神宮司 弘
石川 幸一	和井内 徹	近藤 練太郎	才木 義夫	武田 弘
杉山 忠次	井出 俊一	昭和31年卒業	齋藤 二郎	須藤 隆司
長崎 行太郎	石田 宏	川口 國雄	滝沢 幸二	関口 勝
馬場 和朗	片岡 英世	小島 照美	玉井 滋夫	丸山 長資
松本 健次	佐子 恒男	小松原 彬	中島 眞喜雄	小野 清人
昭和22年卒業	高田 芳行	杉浦 允	永井 滋	村川 信子
別所 範鑑	林 貞吉	鈴木 一郎	西野 武	山本 成也
大川 襄治	昭和28年卒業	田中 宏之	平野 幹雄	昭和36年卒業
大森 威男	石垣 恭弘	役重 典之	富士田 諄一郎	青木 俊一郎
廣田 博	石川 俊美	米倉 久雄	藤田 亘弘	畔上 統雄
稲垣 義雄	鈴木 一成	小池 久則	箕浦 滋	石井 四郎
昭和23年卒業	田村 佐重	柿澤 正彦	宮森 隆志	石井 照明
石橋 昭	田村 碩基	市町 衆司	吉田 靖	石川 隆夫
店網 武男	中村 重信	雁部 敬夫	青木 弘	宇賀治 正名
山下 登	三田 郁夫	田畑 調友	神宮司 弘	越智 健二
伊東 達郎	村上 全司	矢野 弘子	昭和34年卒業	門井 守夫
伊藤 譲	岩崎 晃	吉田 幸三	岩瀬 善則	仮戸 斌
柿本 和男	栗田 吉男	昭和32年卒業	牛込 力夫	河内 宗弘
昭和24年卒業	竹村 政一	阿久津 芳彦	長田 侑巳	木村 繁夫
青池 嘉一	徳永 静	網代 良太郎	児玉 五男	北林 伸一

栗村 規雄	杉田 松生	丹野 隆善	土田 久	昭和61年卒業
越田 明保	藤野 裕	幡野 匡彦	永島 一男	片桐 正志
鈴木 善治郎	本村 貴弘	廣田 才之	宮内 和司	小嶋 芳行
炭田 幸宏	鈴木 忠	三谷 治郎	加村 尚喜	中西 剛
高久 眞	昭和39年卒業	飯原 打越	齋藤 菊夫	昭和62年卒業
崎下 昌道	石川 和正	山岡 景仁	昭和46年卒業	加藤 慎次郎
高柳 裕臣	片岡 康浩	昭和41年卒業	小谷 将彦	勝又 雅子
村越 英彦	金田 紘一	安藤 正信	斉藤 政久	松山 之則
矢本 暖郎	神谷 中	楠 勝行	島津 学	昭和63年卒業
柳 弘来	亀村 轟	高桑 豊	丹野 幸久	石井 睦子
吉田 昌弘	渡辺 久和	塚田 悦造	三宅 久利	三井 宏
佐藤 貞男	久保田 敏夫	奈倉 正宣	昭和47年卒業	森田 孝節
砂川 憲二	児玉 義宏	塙 仁一	斉藤 菊夫	平成元年卒業
中村 紀史	佐藤 栄一	藤池 誠治	森 伸一	磯崎 誠也
小串 照宗	斎藤 伸之	芳崎 弘一郎	昭和48年卒業	黒田 美和子
昭和37年卒業	斉藤 博之	伊藤 英武	櫻川 昭雄	平成2年卒業
伊地知 竜清	斉藤 守園	木村 勲	指田 高好	石川 恵子
伊藤 成利	鈴木 庸一	中田 博	渡辺 明典	菅野 元行
井上 靖治	瀬尾 宏	白竜 美津夫	川津 義人	平成3年卒業
奥山 正之	竹石 肇	彦田 一夫	坂口 信昭	村原 伸
梶山 秀矩	武田 幸久	丸山 武紀	関口 優紀	平成4年卒業
倉澤 守雄	中野 洪	昭和42年卒業	秋久 俊博	宮崎 裕子
小林 昭朗	仲野 一次郎	岡見 宏道	昭和49年卒業	藤池 一誠
駒井 俊雄	野尻 義雄	香取 省二	尾島 光春	平成6年卒業
銀林 博	原 襄輔	中井 忠男	小島 元昭	遠山 岳史
清水 大三	堀 是治	中川 芳雄	澤口 孝志	佐藤 順一
庄司 翠	矢野 彰一郎	橋本 廣雄	昭和50年卒業	平成7年卒業
杉崎 秀夫	山崎 彰	古阪 一昭	上田 賢二	谷合 哲行
丹野 彰	横田 力男	渡部 高尚	上條 治夫	平成9年卒業
津崎 信隆	和田 高伸	稲川 栄一	関口 真理	浮谷 基彦
塚田 政弘	青木 匡	長田 義男	昭和51年卒業	酒井 佳恵
本田 睦治	小屋原 英雄	佐藤 馨	梶 公一	林 秀憲
旭 重男	鈴木 良治	高橋 秀雄	重盛 正男	平成10年卒業
石岡 龍右	瀬尾 直朝	富田 潤一	杉山 文敏	伊掛 浩輝
磯崎 昭徳	田中 誠悦	能代田 順久	昭和52年卒業	平成11年卒業
長田 守一	田原 恭一	山崎 博	土岐 正史	松田 弘幸
植木 庄左衛門	高松 武生	露木 尚光	深澤 豊史	平成13年卒業
徳永 喜八郎	寺山 洋子	昭和43年卒業	昭和53年卒業	太田 洋
昭和38年卒業	中野 弘	浅井 保雄	吉田 光夫	橋内 誠
吉井 彰子	富士 光男	宇智田 俊一郎	昭和54年卒業	藤田 尚之
井野 二陸	藤池 曠子	海上 幸三	浅野 祥司	平成14年卒業
佐野 直道	舘 敏夫	大矢 武司	大野 正博	吉川 賢治
岩本 恒夫	昭和40年卒業	斉藤 明臣	諸原 浩	平成15年卒業
大橋 隆	高田 菊平	進藤 宣詔	谷藤 善美	星 徹
大村 俊晴	有田 喜一	松村 清利	昭和55年卒業	山根 麻衣子
木村 次雄	岩崎 紘一	昭和44年卒業	森 弘通	藤田 泰
小松 允	上田 輝世	石山 利男	昭和56年卒業	平成16年卒業
酒井 誠一	上野 公雄	剣持 晃	木村 文紀	田代 哲也
白鳥 照道	加藤 昌弘	花井 秀之	昭和57年卒業	最上 尚行
竹内 栄多	河村 勝弘	八幡 順一	佐藤 慎一	瀧澤 慶子
塚田 豊	佐藤 瑞雄	横山 二郎	伊藤 和宏	後藤 裕幸
内藤 清剛(逝去)	清水 博太郎	渡辺 光仁	昭和58年卒業	平成17年卒業
中澤 隆夫	竹森 徹	小田原 豊	岩崎 好高	三浦 孝夫
永田 正巳	飯野 宏治	小林 勉	栗原 清文	平成19年卒業
西山 孝彦	岩本 文男	昭和45年卒業	前川 雅昭	薄 舞子
原 正樹	笹子 謹一	柿澤 修	昭和59年卒業	平成20年卒業
山口 重周	杉本 陽一	小林 満	清水 繁	小島 由久
渡部 長幸	武井 秀彦	田中 碩	昭和60年卒業	その他
白石 益郎	高間 伸一	滝戸 俊夫	鈴木 義弘	青山 忠

編集後記

「工化時報」は70年前に工化会が生まれて間もなく「工化会報」として発行が始まったと聞いています。今までに何回か中断されたことはあるものの現在の「工化時報」は今回で25号となり、一つの節目を迎えたと言えるでしょう。25年前の第1号はA3版の紙一枚に両面印刷したもので、現在のものに比べるとお粗末なものですが、私が学生の時(約40年前)は大学紛争中のため自分達でガリ版刷りを発行したこともあるなど、時代を反映したものとなっています。

卒業生が増えるとともに「工化時報」もその役割が増してきていますが、一方で発行の費用は工化会の予算の多くを占めています。より充実した「工化時報」となるよう、今後ともOBの皆様のご支援をお願いしたいと存じます。

(工化時報編集委員 昭和45年卒 永島 一男 記)

お知らせ

平成21年度の行事予定

5/16(土) 工化会総会 (15:00～)

7/25(土) 一日体験化学教室

8/1(土), 2(日) CST オープンキャンパス 2009

連絡先

- ・工化会及び会費に関する問合せ→庶務(澤口 TEL:03-3259-0819)
- ・住所変更に関する問合せ→会員(櫻川 TEL:03-3259-0802)
- ・工化時報に関する問合せ→会報(秋久 TEL:03-3259-0806, FAX:03-3293-7572, E-mail:jihou@chem.cst.nihon-u.ac.jp)

広告募集

工化時報では会社広告を募集しています。掲載の詳細につきましては会報委員会までお問い合わせください。

掲 載 料 1 件 : 10, 000 円

発行所

東京都千代田区神田駿河台1-8
日本大学理工学部工化会会報委員会

◎伊藤和雄, 永島一男, 小川 誠, 橋本徳子, 石黒香織,
秋久俊博, 谷川 実, 遠山岳史, 平野勝巳, 森田孝節

学生編集委員

M1 須賀 徹

4年 石部奈美子, 竝木和彦, 平岡佐和子

3年 山下七重, 田中絵里, 辻村佳奈子, 内藤千裕, 中沢舞貴,
森川 純, 諸 明勲, 横家 和希

ホームページ, <http://www.chem.cst.nihon-u.ac.jp/index.html>